

## 新図書館ツアー 案内説明詳細資料

### [全体概要]

青山学院創立 150 周年記念事業の一環として位置づけ、青山学院が 150 周年を迎えるこの記念すべき年に、図書館棟「マクレイ記念館」がオープンしました。

施設の名称は、青山学院の 3 つの源流の一つである「美會神学校」を設立した初代院長ロバート・S・マクレイを記念してその名を冠しています。約 150 万冊の蔵書を誇る図書館本館、情報メディアセンター、さらにアカデミックライティングセンターまでを一つの建物に集約した総合的な学術情報施設です。

地下 1 階・1 階は情報学習フロア、2～6 階は図書館フロアとなっています。情報学習フロアは「知との出会い」を実現する空間として、全学生に関連のある PC 教室、語学や最先端の ICT（情報通信技術）を学べる設備環境を整えています。また、図書館フロアの 2～4 階は「知を広げる」場所として、個人で文献を読むだけでなく、学生同士で学び合えるラーニングコモنزなどを設けています。5・6 階は「知を深める」ための専門的な文献や研究個室のほか、学外とのオンライン会議にも対応できるプレゼンテーションルームを配置し、より専門性の高い学習や討論のできる環境を提供しています。

マクレイ記念館は、本学における新たな「知の拠点」として教育研究の中核施設の一つとなり、さらには社会貢献へのつながりも期待されています。

### [構想の中心は「学生本位」]

マクレイ記念館構想の中心にあるのは「学生本位」というコンセプトです。変化し続ける社会の中で学びにおける学生のニーズも多様化しています。そうしたさまざまなニーズに応えられるよう、館内では利用目的に応じたゾーニングを採用しました。じっくり文献と向き合い、思索を深めたい時には静音性の高いゾーンを、また仲間と情報を共有したり、意見交換を行ったりしたい時には「ラーニングコモنز」をはじめとしたグループ学習用のゾーンを選ぶことができます。一方、イベントスペースやプレゼンテーションルームといった一部のエリアに関しては、可変性の高い設計や什器を採用し、自由な発想で活用できるようにしました。

さまざまな学術施設を集約したマクレイ記念館では、書籍による学び、デジタルの学び、さらに対人コミュニケーションを介した学びを有機的に進めることができます。紙の本に親しみながら、情報学習フロアで最新のデジタル技術を駆使し、さらにラーニングコモنزで知的交流を図るという「融合の学び」から、新たな発想が生まれていけば素晴らしいと思います。

### [設計コンセプト]

多くの議論を重ねた結果、「学生の知的な居場所となること」また「学生と共に進化する図書館」というコンセプトが定まりました。資料の利用や学習の場所としての機能を果たすだけでなく、キャンパスライフの拠点となるような居場所づくりがゴールとしました。

マクレイ記念館を学生にとって有意義な「居場所」とするためには、学生自身が自分の目的に合わせて最

適な場所を選べるように考えました。その結果、利用者の活動内容から空間づくりを考える「アクティビティ・ベースド・ライブラリー」というキーワードを設定しました。

#### [外観の特徴]

建物の外観を通じて「学生の居場所」を表現しました。ひさし状に張り出した、鉄筋コンクリートで作られた構造床スラブと、金属製の窓枠のサッシュによるシンプルな構造を基本に、全面的にガラス窓を配したことで、館内やテラスで活動する学生の姿を鮮やかに際立たせるのが狙いです。学生のアクティビティそのものが、キャンパスの新たな景観を形作っていくというメッセージを建築デザインから表現しました。

#### [情報メディアセンター]

情報メディアセンターは、本学の ICT 教育・研究環境をサポートする組織であり、これまで PC 教室やネットワークの導入など、社会の動向より一步先んじて提供してきました。同様にマクレイ記念館の地下1階と1階を占める情報学習フロアでは、従来の教育環境を確保しながら、変わりつつある利用形態への適応とさらに将来の動向を見越した対応を意識しました。

例えば近年では、学生自身が調べ学習をして、その成果を資料もしくは映像化して提出するという新たな学習スタイルが定着しつつあります。情報学習フロアでもこれらの学習スタイルに対応できるような空間や設備を整えました。今回、館内に各種機器の貸出ロッカーを新設しました。ラーニングcommonsとしても機能するラウンジエリアに関しては、今後も図書館や外国語ラボラトリーと協力をしつつ発展させることを予定しており、育成した学生スタッフが運用に携わることを想定しています。

#### [バラエティに富んだ館内の空間づくり]

学生一人一人が「自分の居場所」を選べるように、館内ではバラエティに富んだ空間づくりを行いました。まず学生には気軽に足を運んでもらうべく、授業で学生が利用する IT 講習会室・PC 教室を情報学習フロアである地下1階・1階に配置。そして、サポートラウンジを1階の入り口近くという最もアクセスしやすい場所に配置しました。地下1階と1階をつなぐ階段状のホールは、カジュアルな発表の場やさまざまなイベントに活用できます。階段部分はベンチとして利用できるほか、周囲に設けられたカウンターは立ち見席としても使うことができます。

図書館フロアでは、静かな研究・学習空間である研究個室やキャレルデスク（個席）を設ける一方、アクティブな学習空間としてラーニングcommonsやグループ学習室を設けました。また各フロアには学習スペース「Aisle（アイル：教会の側廊）」を設けていますが、こちらも目的別に3種類に分けています。静音性の高い「Deep」の Aisle は集中して学習したい時に、移動可能なデスクやホワイトボードを備えた「Active」の Aisle はグループ学習に、飲食可能でカフェのような雰囲気「Change」の Aisle は気分転換をしたい時に、と使い分けることができます。情報学習フロアのラウンジも、ソファでゆったりとくつろげるラウンジと、アクティブな雰囲気グループ学習にも適したラウンジの2種類を設け、目的やシチュエーションによってさまざまな環境を選べるようにしています。

### [聴覚や嗅覚といった五感からのアプローチ]

学生の学びをより積極的にサポートするため、聴覚や嗅覚といった五感からのアプローチも行っています。例えば「静と動」のゾーニングを図るため、吹き抜け周辺には「サウンドマスキング」という音響設備を設けました。これは空調音に似た環境音を流すことで、漏れ聞こえてくる会話の声などを目立たなくするものです。

また「静と動」の感覚には肌で感じる「気流」も大きく関係するため、複数の空調を使い分けています。

「Deep」の Aisle のような静的なスペースでは無風の放射パネルを採用し、動的なスペースではやや気流感のある床付けの空調を用いています。適度な気流感は空間に活気をもたらすとともに、飲食可能な「Change」の Aisle などでは匂いがこもるのを防ぐ役割も果たします。

視覚からのアプローチとしては、フロアごとに内装のイメージを大きく変えています。図書館の導入部となる低層階では白木やオープンスペースを多用し、明るく親しみやすい空間を演出しています。一方、専門的な書籍や研究個室をそろえた上層階では、色調の濃い木目やダークトーンのインテリアを用いた知的で落ち着いた空間としています。さらに IT 講習会などを行う情報学習フロアでは、黒を基調にクリエイティブな要素を強調しました。

### [空間構成と機能]

2 階から 6 階までを占める図書館フロアでは、ダイナミックな吹き抜けが印象的です。

設計者として一番の見どころと捉えているのが、吹き抜けをずらしながら積層させた中央部の閲覧スペースです。フロアごとに少しずつ吹き抜けや階段の位置をずらすことで、リズムと解放感のある空間を実現しました。図書館フロアでは吹き抜けによって解放感を演出するとともに、天井にはりの突起がない「フラットスラブ構造」やスリムな柱を用いることで、すっきりと見通しの良い空間を作ることができました。一方で「ブレース」という耐震部材を採用することで、マクレイ記念館では建築基準法で定められた性能の 1.25 倍もの耐震性能を確保しています。

なお、この吹き抜けは、環境への配慮という観点からも大きな役割を果たしています。春秋には、吹き抜け部分の上昇気流を活用した「自然換気システム」を用いることで、空調熱源をほぼ使わずに館内を約 26 度以下に保つことができるのです。

その他にも井戸水の空調利用や屋上緑化といったさまざまな工夫を行っています。

### [最大 80 万冊を収蔵の自動書庫]

4 階から 6 階にかけて設置された自動書庫は最大 80 万冊を収蔵。

1977 年に旧大学図書館が建築されてから約半世紀が過ぎ、十分な座席数と蔵書スペースを備えた新図書館の建築は本学にとって念願といえるものでした。

いつの時代も一貫していたのは、学生の成長を後押しするための「自らも成長する図書館」というコンセプトでした。今日に至るまで「成長」というコンセプトが継承され、多くの検討を重ね、今回のマクレイ記念館の開館に至ったことは非常に価値あることと考えます。

### [進化する図書館]

将来的なニーズにも対応できるよう、各階の Aisle やラウンジ、プレゼンテーションルームには移動可能な什器を配置するなど、可変性を重視した設計としています。その一方でガラんとした無個性な空間とならないよう、メリハリのある空間デザインを意識しています。

今回導入された IC タグも、図書館としての「進化・拡張」に大きな役割を果たしています。IC タグを用いて情報を一元化することで、本のセルフ貸し出しなどが可能になりました。図書館フロアでは、各閲覧席からよく見える位置に 80 万冊の収蔵能力を持つ自動書庫を設置していますが、2025 年度には、学生自身が自動書庫を操作して本を取り出すというシステムも運用開始を予定しています。こうしたシステムを通じて、膨大な「知」へのアクセスの可能性が大きく広がります。

自動書庫セルフブース。2025 年度には、学生自身が自動書庫を操作して本を取り出せる予定です。

### [施設、蔵書数【2024 年 4 月 1 日現在】]

総面積(m <sup>2</sup> )	12,567
閲覧面積(m <sup>2</sup> )	6,957
閲覧座席数	1,603
蔵書冊数	約1,032,000
開架図書冊数	約317,000